

# 期待と落胆 刑事は負けたのか

## 世田谷一家殺害22年

### 千思万考

小田急線成城学園前駅から仙川沿いに進むと、目的の家が現れた。主を失った家は朽ちていくことがよく分かる。その家の周囲はフェンスで囲われ、壁のいたるところに、ひびが入っていた。平成12年12月、東京都世田谷区の会社員、宮沢みきおさん(当時41)一家4人が殺害された事件は発生からまもなく22年。この間は、解決への期待と落胆が交錯したものであった。

#### 特別な夜

22年のなかで、発生から5年を前にした17年末が、捜査に最も熱が入り「事件が動く」と感じさせた。17年12月30日深夜。寒空の下、現場に捜査幹部が集まった。捜査1課長は毎週末に捜査本部へ通い詰めた久保正行氏。同理事官には連続幼女誘拐殺人事件で容疑者を「完落ち」させた大塚泰広氏。所轄の成城署長は後に殺人事件被害者遺族の会の立ち上げに参画し、退職後も事件と向き合い続ける土田猛氏だ。

現場で大塚氏の声が響く。「風呂場の電気つけろ」「OK」。1年に1度だけの特別な夜。発生時間帯に現場を再現していた。刑事も周囲の道路で通行人や車を止めて聞き込み捜査を行った。久保氏は「この木は犯人を知っている」と現場裏のケヤキの木をさすった。悔しそうな顔が今も脳裏に残る。こうした光景

はもう何年もない。「所詮はパフォーマンス」。そんな意見もある。だが、この17年前の夜以上に、捜査幹部の「熱意」が伝わってくることはなかった。

#### 常駐なくなり

「特別な夜」以外の現場も変わった。成城署では現場保存のため24時間365日、制服警察官を住宅前に

配置していた。事件から15年以上たったある夜も、若い警察官が熱心に通行人に職務質問していた。その姿からは、現場保存だけをしていけばよいという姿勢でなく、事件を風化させないという強い思いを感じた。だが、令和2年には現場の常駐もなくなり、こうした光景もなくなった。結果、その年、ある事件



#### 世田谷一家殺害事件

平成12年12月30日深夜、東京都世田谷区上祖師谷の会社員、宮沢みきおさん方で、みきおさんと妻の泰子さん(当時41)、長女のいなちゃん(当時8)、長男の礼君(当時6)が包丁で刺されるなどして殺害された。7年の八王子スーパー強盗殺人事件、8年の柴又女子大生殺人放火事件と並び警視庁管内の「三大未解決事件」とされ、三大大事件の中で唯一、現場建物が残されている。情報提供は成城署捜査本部(03・3482・3829)。

が発生した。小さいニュースで報じられたが愕然とした。現場の住宅を囲うフェンスに落書きをした少年が摘発されたのだ。少年は「事件を知らなかった」と供述。警察官が常駐していたのは事件は防げたが、問題はそこではない。常駐をやめたことが事件の「風化」につながっていると思えてならないのだ。

今年の情報提供は127件(11月末時点)。関心は高い。風化は外部でなく警察内部で起きているのでは。かつて、犯人と同じ状況を再現するため電灯も暖房も消し現場に1人で泊まり込んだ刑事がいた。捜査方針を巡って幹部と対立し辞めた刑事もいた。「犯人を捕まえ現場を案内させた」。こうした思いが刑事を突き動かす原動力ではなかったのか。刑事は一体、誰に負けたのか。

#### 熱意はどいへ

「刑事がホシ(犯人)ではなく、肩のホシ(階級章)を追うようになったらおしまいだ。昭和の名刑事、平塚八兵衛の言葉だ。上層部に熱意はあるか。なければ現場の刑事は内なる敵とも戦ってほしい。現場の刑事の執念が解決へ導くこと信じている。(荒井敬介、写真も)

日刊ゲンダイ 2022年12月24日

世田谷一家殺害事件は未解決のまま 22年 定年後も活動続ける元成城署長の葛藤と唯一の望み 土田猛さん（元成城署長）

2000年12月30日の深夜、東京・世田谷区上祖師谷の住宅で、会社員の宮沢みきおさん（当時44）と妻の泰子さん（同41）、にいなちゃん（同8）、礼くん（同6）の一家4人が何者かに殺害された。現場には犯人のものと思われる指紋と血痕が残されていた。警視庁の捜査本部が置かれている成城署の元署長で、07年3月の定年後も事件解決のために活動する土田さんに聞いた。

◇ ◇ ◇

今月17日、現場近くの都立公園で7年ぶりに開かれた集会に、みきおさんの母・節子さん（91）の姿があった。節子さんは事件前の8年間、月曜と木曜には孫たちの面倒を見るために、この公園の前を通っていたという。

その頃を思い出しながら、「おばあちゃんって、いつも孫たちが玄関まで出迎えてくれたんです。その姿を思い出してしまうから、公園にも近づけないんです」と話していたこともあった。

事件当時は築10年だった住宅も、現在は老朽化が懸念されており、警視庁は遺族に取り壊しを打診している。

「今回、現場が見える公園で集会を開いたのは、高齢の節子さんが健康なうちに、リアルな現場で訴えをしてもらおうと考えたからです。そして現場の住宅の証拠保全のためでもありました。あの日、犯人がどこから出入りしたのかすら分かっていないのに、取り壊すのはいかがなものか。犯人が捕まれば現場検証も必要ですし、現場がなくなってしまうと遺族の不安も残ります。証拠保全をすべきか議論に乗せる目的もありました」（土田さん）

事件発生時、現場には犯人の血痕や食べ残しの形跡、靴跡なども揃っていた。パソコンの通信記録から犯人は現場の住宅に10時間以上滞在していたことも分かっている。10年4月に殺人事件の時効が撤廃（刑事訴訟法改正）されたものの、犯人逮捕の手掛かりはない。

■DNA 捜査に望みも警察庁は活用せず

土田さんが唯一の望みをかけているのが、DNA 捜査だ。DNA 型からは、髪色から病歴をはじめ属性(性別・年齢・身体的特徴)なども解明できるため、米国では似顔絵作成にも活用されて多くの事件を解決に導いている。

「日本でも、容疑者に関する警察庁の DNA 型データベースはありますが、個人識別(逮捕後に採取して本人か確認するなど)の範囲のみで活用しています。海外でやっているような属性部分については、警察庁が『究極の個人情報』として踏み込まないという見解を示しました。しかし、なぜそうまでして犯人の人権を守るのか。

そもそも DNA 型の採取や利用、保管や消去などを定めた法律はなく、05 年ごろには国会で法制化の必要性が議論されましたが、残念ながら成立に至らずうやむやになったまま。現在は国家公安委員会規則や警察庁通達によって個人識別のみで運用されていますが、世田谷一家殺害事件では証拠が残っているだけに悔しい」

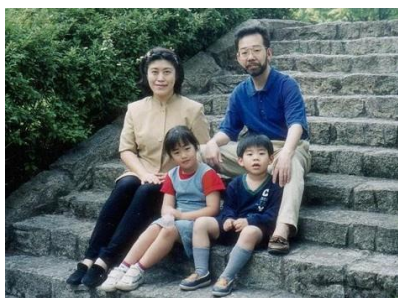
節子さんはこうも語っていた。

「あの年末年始、息子が予約してくれた温泉で、息子家族と一緒に過ごす予定でした。それが事件でかなわず、犯人逮捕を待たず亡くなった夫は余計に無念だったと思います」

年末には未解決のまま 22 年を迎える。

毎日新聞 2022/12/24

## 「夜中に名を呼んでみる」世田谷一家殺害 日記で明かされた母の思い



亡くなった宮沢みきおさん一家＝警視庁のホームページから

<一家全滅との知らせ 信じられないまま……>

2000年12月31日夜。さいたま市の宮沢節子さん（91）は震える手で日記にそう記した。東京都世田谷区で長男みきおさん（当時44歳）一家4人が遺体で見つかったとの連絡を受けた直後のことだ。あの日から間もなく22年。事件について節子さんが自ら語ったことはほとんどない。明かされることのなかった思いは、日記の中に残されていた。22年分の日記を通し、これまでの日々をたどる。

節子さん宅の棚の上に置かれた紙箱の中に、何十冊もの年単位のスケジュール手帳がびっしりと収められている。節子さんは長年、これら手帳を日記代わりとして、その日の出来事や心情を書き留めてきた。記者の願いに応じ、節子さんが日記を見せてくれた。

<世田谷 手作りケーキでご馳走（ちそう）してくれる>

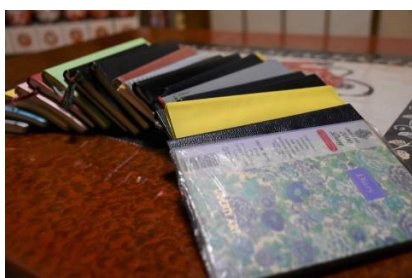
事件が起こる1週間前の00年12月23日の日記だ。この日、節子さんはみきおさん宅に招かれ、妻泰子さん（当時41歳）と長女にいなちゃん（同8歳）、長男礼くん（同6歳）と一緒にクリスマスを祝った。4人に会った最後の日となった。

「昔はこんなふうに、4人との楽しかった思い出や、孫の成長なんかを毎日書いていたんですけどね」

事件が起きたのは同30日夜。冒頭の言葉は、事件を知り、帰省先の岩手県大船渡市から自宅のあるさいたま市へ戻る際に書かれた。

事件で日常は一変した。日記はその日の天気や来客者の名前など単調な「記録」に変わる。

「あの子たちのことに触れると、余計に傷が深くなり自分がおかしくなってしまうようで」



事件以降も書き留めてきた日記帳。言葉にできない思いをつ

づっていた＝さいたま市で2022年12月21日午後4時27分、岩崎歩撮影

22年間で事件について触れた日はごくわずかしかない。それでも、4人への思いがあふれ出す時はある。

<心が痛くなる 夜中1人で4人の名を呼んでみる>

事件から約2年が過ぎた03年1月3日。4人を思い浮かべ、苦悶（くもん）する様子が書かれていた。

<生涯で一番悲しい地獄を見てから丸3年。空元気で過ごして耐えてきた3年だったと思う>

03年12月31日には「地獄」という率直な言葉でその悲惨さを書き残した。

「一人残されるのが怖くて、早く4人のところにいきたい」。年を経るたびに、節子さんはそんな気持ちに駆られていたという。



小さな背中を丸め、日記帳を読み返す宮沢節子さん

＝さいたま市で2022年12月21日午後4時38分、岩崎歩撮影

12年9月6日、夫の良行さんが84歳で亡くなった。

<12時8分死亡 夜中11時30分 急遽（きゅうきょ）TEL、タクシーで行く（間に合わず）>

それまで警察対応や遺体との対面、マスコミ取材などは全て良行さんがこなし、節子さんはその背中に隠れてきた。「お父さんが逝ってしまい、怖くて、心細かった」

しかし、約1カ月後の12年10月7日の日記にはこう記している。

<弱ってはいられない>

自分を鼓舞するような言葉だった。良行さんに代わり、自分が前に出る番だという決意のようにも感じられる。以来、節子さんは1人で取材に対応するようになった。「事件を忘れられないためにも、強くなるしかありませんでした」

事件発生日となる12月30日が近づくと、メディアの取材が殺到し、慣れない取材に戸惑った。12年12月22日の日記には、こうつぶった。

<インタビューされておたおたするばかりです。仕方がないのかな。早くこの状態が終われば良いな。それは解決することで、心から望むこと。お父さん、助けてください>



一家4人が死んでいるのが見つかった宮沢みきおさん方(右上) = 東

京都世田谷区上祖師谷で2000年12月31日午後0時35分、本社ヘリから、岩本準一撮影

事件解決を願う一心で、人前では気丈に振る舞った。「でも本当はつらくて、心はずっと寂しい。頑張らないとって思う一方で、やっぱりみんなのところに行きたいなって思うんです」

心が折れそうになると、5人の遺影に「弱かった私が1人で頑張っていますよ。どうか力を貸してください」と何度も語りかけ、自分を奮い立たせた。

ただ、事件は一向に解決せず、むなしさも募る。

<満17年。何の変化もなく、進捗(しんちよく)もなく、足踏み状態なのが残念でならない。私が生きている間に何とかならないかと願うばかりです。自首以外ないのかと心から望むのみです>

<満19年、そろそろ自由にしてほしい。探して見つからないので、何故こんな件をおこしたのか知りたいだけ>

17年12月31日と、19年12月30日の日記には、焦りの色がにじんでいる。

「なぜ殺されなければならなかったのか。せめてそれだけでも教えてほしいんです」。それが今、節子さんの唯一の願いだ。

「いつも4人のことが心にある。いつか、いい知らせが来たときには、4人への思いを日記に書きたいです」。小さな背中を丸め、手帳を優しくさわった。

22年分の日記のすべてに、本来迎えるはずだった4人の誕生日が小さな文字で記されていた。【岩崎歩】